

知育玩具インストラクター制度を用いた家庭保育の環境改善への取り組み

○藤田 篤(日本知育玩具協会) 小川 直茂(岐阜市立女子短期大学)

1. はじめに

長年にわたり育児・保育の現場に関わる中、「子育てに対する不安」「子育ての方法が分からない」といった家庭保育の悩みが深刻化していると感じる。これらの悩みは地域(都市/地方)や母親の学歴・職業の差異に関わらず発生しており、最終的に育児放棄や児童虐待といったネグレクトの要因にもなりうる。健全な社会環境の実現に向けて、家庭保育の悩みに関する問題を早急に解決することが求められる。

こうした状況を踏まえて、筆者は「良いおもちゃでの良いかかわり」を通じて家庭保育の環境改善をめざすべく、一般社団法人日本知育玩具協会®(注 1)を設立し、育児および保育支援活動に取り組んでいる。

日本知育玩具協会®(以後、協会と記述)は、前身である遊び教育研究所®(おもちゃと教育、心理学の知見を体系化し、遊びを通じて親子の幸せを最大化する組織)を改組して 2014 年に発足した。協会活動の特徴として、以下の 3 点が挙げられる。

① エリクソンのライフサイクル理論にもとづくプログラム

発達心理学者・精神分析家である E.H.エリクソンのライフサイクル理論(注 2)にもとづき、子どもの成長発達を理解して接することができる方法論を学習する。

② 良質なおもちゃを用いたメソッド

筆者がこれまで培った知見にもとづき、国内外の様々なおもちゃの中から良質なおもちゃを厳選し、家庭保育の実践におけるツールとして使用する。良質なおもちゃの与え方と遊び方を習得し、遊びを通じて子どもの成長と良好な関係を構築する。

③ 育児の実践力向上を促す講座開講制度

①②の学習後、インストラクターとして講座を開講する仕組みを提供する。教える側に立って様々な子どものケースに対応することで、継続的な学びへと繋げ、家庭保育の実践力向上を促すことを意図している。

協会では 2019 年 12 月現在、全国で延べ 170 名のインストラクターを輩出し、ベビートイ・インストラクター®/キッズトイ・インストラクター®/知育玩具インストラクター®の各種養成講座や、良いおもちゃの与え方講座などの開講を通じて、家庭保育環境の改善に向けた啓蒙活動を実施している。

2. 研究目的

本発表では、前章で記した協会の 3 つの特徴のうち、① エリクソンのライフサイクル理論にもとづくプログラムが実際に家庭保育でどのように役立っているか、事例を

通じて分析する。なお、エリクソンのライフサイクル理論は 8 段階で構成されるが、本発表では特に乳児期の「基本的信頼」、幼児期の「自律性」に焦点を当てている。

3. 調査手法

2019 年 11 月から 12 月にかけて、アンケート調査を実施した。調査対象者は、協会のインストラクター養成講座を受講して現在インストラクターとして活動する女性 3 名である。調査項目は、(1)自身の家庭保育における子どもの問題行動の概要 (2)問題行動に対して、インストラクターになる前ならどう対応したと思うか (3)問題行動に対して、実際にはどう対応したかの 3 点で、回答形式はいずれも自由記述とした。

4. 調査結果および分析

4.1. A 氏の事例

(1)問題行動の概要

2018 年 6 月、母親(被験者)が体調を崩して 3 日間の自宅安静で過ごしていた間、子(2 歳 3 ヶ月 男)は母親と離れて、父親や祖父母と過ごしていた。普段、父親や祖父母との関係は良好だが、母親が関わってくれないことに対し、次第に不安が生じてきた。「いつもは抱っこしてくれるのに何でママは抱っこしてくれないのー!」、「パパはいやー、ママがいいー」「ママー! ママー!」などと暴れ、泣き叫び、情緒が不安定になった。

母親の体調が回復した後も、常に「ママがいいー」と言ったり、家事で忙しい時も「ママ遊んでー」「ママ抱っこー」と言うなど、母親から全く離れられなくなった。既にイヤイヤ期の兆しがあったが、その傾向が顕著になり、何でも「イヤイヤイヤ」と言うようになった。

(2)以前ならどう対応したと思うか

子の態度を愚図りと判断し、待たせようとする。また、子の要望をわがままと捉え、甘え癖がつくと思って家事をやめずに対応する。言うことを聞かない子に苛立ち、最終的には静かにさせるためにテレビをつけるなどする。

(3)実際はどう対応したか

家事を中断して「一緒に遊ぼうね。ママと何して遊ぶ?」と話しかけ、子の気持ちが落ち着くまで「母親と遊びたい」と言う要求に向きあった。そして、気持ちが落ち着いてから、「ママご飯作りたいんだけど、一緒にお手伝いしてくれる?それともおもちゃで遊ぶ?」と選択させた。

家事の最中に抱っこを要求された時も、「抱っこしてほしいんだね」と気持ちを代弁して受け止め、要求に応えて向き合った後、「絵本みる? 何の絵本をみようか?」と言って子が読んでほしい絵本を選び、読み聞かせをして気持ちを落ち着かせた。

(4) 筆者による調査結果の分析

「家事を中断し、子の気持ちが落ち着くまで要求に向きあった」や「子の気持ちを代弁して受け止め、要求に答えて向き合った」は、子どものありのままの姿を受け止め、その要求に心から喜びつつ応える行為であり、基本的信頼の確立に結びつく行動だといえる。

また、「子の気持ちが落ち着いてから、子自身にその後の行動を選択させた」は、大人側の要望を子どもに伝えつつも、子どもがその要求に対して自らの意志で応えるまで待つ行為である。これは、自律性の確立に結びつく行動だといえる。

4.2. B 氏の事例

(1) 問題行動の概要

2019年10月、母親(被験者)が子(2歳9ヶ月・男)と出かけようとした際に、子がお気に入りの靴下以外は履きたくない駄々をこねた。用意した靴下を履かせようとしたところ、自分で履きたいと言って怒った。

(2) 以前ならどう対応したと思うか

用意しておいた靴下を無理矢理履かせて、子が泣いたまま出かける。

(3) 実際はどう対応したか

お気に入りの靴下が履きたい気持ちを「あれ、かっこいいから履きたかったんだよね」と受け止めつつ、洗濯して濡れているため履けないことを伝えた。そして、他の靴下を3足見せて子に選ばせた。子が自分で靴下を履くのに時間がかかることも受け止め、自分で履き終えるのを待ち、最後に「よく自分で履けたね」と声をかけた。

(4) 筆者による調査結果の分析

子が自ら気に入っていた靴下だけを履きたかったという要求が、母親の共感の声かけによって受け止められた。その上で3足の選択肢を提案され、自己決定の機会が与えられた。母親は、以前の自分自身であればこの行動をとらなかつたであろうと記述しており、母親がこの場面をエリクソンのライフサイクル理論における「クライシス(危機)」の場面と捉え、発達課題を意識して、基本的信頼を確立すべく行動したといえる。

また、子の要求が「自分が履きたい靴下を履く」から「自分が選んだ靴下を自分で履く」に変化したことも感じ取り、母親がそれを受け止めている。子は自分のペースで靴下を履き終えるまで親に待ち続けてもらったことで自己決定を実現しており、子が自分で履けたことを褒めてもらったことで、満足したと想像できる。その結果、親の要求である「お出かけ」を受け止め、良好な関係を保ちつつ自ら出かけており、この場面は「自律性」の確立に結びつく行動だったといえる。

4.3. C 氏の事例

(1) 問題行動の概要

2019年10月、子(3歳4ヶ月・女の子)が、室内におもちゃ(花はじき)を投げてばらまいていた。

(2) 以前ならどう対応したと思うか

子どもを叱り、物は投げてはいけないと諭す。それでもやめない場合、(しつけとして)しばらくおもちゃをしまう。

(3) 実際はどう対応したか

声をかける前におもちゃを投げて何をしているのかを観察した。すると、子が動物園のエサやりの見立て遊びをしていたことが分かったので、その思いに沿って見立て遊びに加わり、「飼育員さーん、こっちの動物さんたちにもエサあげてくださいーい」と声をかけた。子がイメージしている世界を尊重しつつ、おもちゃが散らかっても差し支えないと母親が考える場所に遊びの場(=花はじきを広げる場)を提案し、子が納得したので移動した。

投げる行為をやめさせたいと思い、「そーっとあげた方が動物さんたち上手に食べられるんじゃないんですかねー?」と、投げずに遊ぶことを子に提案した。しかし子は、「でもシマウマさんは投げた方がいいんですよー」と、以前動物園に行った時に体験したエサやり体験を再現したいと主張し、投げる行為をやめようとしなかった。

そこでいったん声かけを止め、さらに本人の様子を見てみると、思いきり投げるのではなく、本人なりに少し力を加減していることに気づいた。そのため、良いとも駄目ともそれ以上は声をかけず、子の遊び方を尊重して静かにその場を離れた。

(4) 筆者による調査結果の分析

大人(被験者)にとって望ましくない行為と感じつつも、「声をかける前におもちゃを投げて何をしているのかを観察した」ことで、子の行為が動物園ごっこの一環であることに気づいた。子の遊びに大人が寄り添って自然な形で遊びに加わることで、子が遊びで膨らませていた世界観を損なうことなく会話の機会をつくるに至った。この行為は、ありのままの子の姿を受け止める行為であり、基本的信頼の確立に結びつく行動だといえる。

また、おもちゃを投げてほしくないという大人の要望を伝えつつ、投げることを止めるかどうかの意思決定を子に委ねることで、待つ姿勢を子に伝える環境を構築している。これは、自律性の確立に結びつく行動だといえる。

5. おわりに

調査を通じて、3名のインストラクターが家庭保育でエリクソンのライフサイクル理論にもとづく学びを活用し、基本的信頼および自律性の確立に結びつく行動を自覚的に取り組む具体例を確認することができた。

今後の展望としては、同取り組みによる家庭保育の質の向上と育児不安の解消との関係性について更に知見を深めていきたいと考える。

【謝辞】

本発表の調査にあたり、インストラクターの伊藤藍子氏、北山まなみ氏、深谷早希氏にご協力いただきました。この場を借りて謝意を表します。

【注・参考文献】

1. 日本知育玩具協会: <http://edu-toy.or.jp>
2. E.H.エリクソン著、仁科弥生訳: 幼児期と社会 I, みすず書房, pp.317-352, 1977